1968年2月2日第３種郵便物認可

特別号

琉球新報
The Ryukyu Shimpo

２０２４年（令和６年）
６月23日（日）
発行所 琉球新報社
〒900－8525 那覇市泉崎１－10－３
©琉球新報社2024年

平和 次代へ

平和の礎の刻銘を見つめ、手を合わせる女性＝23日午前６時50分、糸満市摩文仁の平和祈念公園（ジャン松元撮影）

沖縄戦79年 慰霊の日

沖縄は23日、沖縄戦の組織的戦闘が終結したとされる「慰霊の日」を迎えた。多くの一般住民を巻き込み、悲惨な地上戦などが展開された沖縄戦から79年。県内各地の慰霊塔や戦跡には朝から多くの人々が訪れ、再び戦場にならないようにと不戦の誓いを新たにした。

戦争で亡くなった20万人余りを悼み、世界の恒久平和を願う「沖縄戦全戦没者追悼式」（県・県議会主催）が午前11時50分から、糸満市摩文仁の平和祈念公園で開かれる。梅雨明けの日差しが照りつける中、平和祈念公園には早朝から多くの遺族らが訪れ「平和の礎」に花を手向け、手を合わせた。

平和の礎には国籍を問わず、沖縄戦などで命を落とした人々の名が刻まれている。今年、県出身の24人を含む１８１人が追加され、総数は24万２２２５人となった。

追悼式では、正午に黙とうをささげ、玉城デニー知事が平和宣言を読み上げる。県遺族連合会の我部政寿会長が追悼の言葉を述べ、来賓の岸田文雄首相と額賀福志郎衆院議長、尾辻秀久参院議長もそれぞれあいさつをする。

また、県立宮古高校３年の仲間友佑さんが自作の平和の詩「これから」を朗読。世界で戦争が続くことに抗して「もっともっとこれからも／僕らが祈りを繋ぎ続けよう」と誓う。

23日には各地で追悼式や慰霊祭が行われる。市民有志が平和の礎に刻銘された名前を読み上げていた取り組みは、この日の追加刻銘分で全て読み終える。

▶詳細はあすの紙面をお読みください
▶ryukyushimpo.jp
▶購読のお申し込みは フリーダイヤル 0120－395069

第3種郵便物認可
第3種郵便物認可

癒えぬ戦禍の傷

国防が奪った　沖縄戦79年

住民、マラリアの死地へ

「日本のため 犠牲になって」

「勝ってくるぞと勇ましく」誓って国を出たからは」。1944年当時、波照間国民学校1年の波照間シゲさん（86）は軍歌を高らかに歌い、集団で送られた。雨が降れば米や麦、アワ、コーリャンが実り、家畜を育て、豊かな島だった。

波照間島に軍備はなく、島の青年らは石垣島の日本軍飛行場建設にかり出された。島に軍人が来たのは45年。陸軍中野学校出身の軍曹、山下虎雄（本名は酒井喜代輔）が教師と身分を偽り、青年学校に赴任した。沖縄戦を指揮した第32軍が送った離島残置諜者だった。

3月、山下はマラリア有病地の西表島に疎開するよう住民に命じた。反対する住民には抜刀した。島の有力者にこう頼んだという。

「敵が慶良間に上陸して日本軍の配置がもれたので陥落した。八重山にもおこないないと限らないので、日本全体、八重山全体のために犠牲になってくれ。国を守るため住民の命は軽んじられ、死地へ追いやられた。

住民らは4月8日夜、カツオ漁船に乗った。当時7歳の波照間さんもいた。

「シゲ、おいで」。朝、西表島に着くと、先に渡っていた母親のナレさんが浜で手招きし、病気から守る願掛けをしてくれた。

山下を派遣した第32軍の目的は波照間の島民を監視してゲリラ戦を展開することだった。当時15歳の大仲シンスケさん（95）も動員された一人。住民が移動した後もしばらく島に残った。「アメリカが上陸してきても動くな、竹やりで最後まで島を守れ、と言われていた」

西表の南風見田に移った後も、山下の監視と暴力は続いた。大量発生したハエをわずかしか捕れなかったしみは癒えない。

戦後、島を訪れた山下に住民は抗議文書を突きつけ「退島」を迫った。「疎開しなかったら殺された。そうでなかったら誰があんな所に行くか」。大仲さんは怒りをぶつける。

今、日本政府は南西諸島での戦闘を想定し、県外避難計画を具体化させている。優しかった母親をマラリアで失った波照間さんは「二度としたくない」。今年、南風見田をのぞむ波照間島の庄屋の慰霊碑が建立された。急激な軍備の波に立ち向かうようにたたずむ。（中村万里子）

◇　◇

沖縄戦では「国防」が掲げられた末、県民の命、食料や土地、文化などが奪われた。台湾有事が強調され、南西諸島で軍備強化が進む中、その実相を見つめる。

（19日付掲載の連載「国防が奪った」の第1回。「琉球新報デジタル」で続きが読めます）

軍歌を歌った戦前の様子などを語る波照間シゲさん＝5月18日、波照間島

マラリアに感染するなど過酷だった戦争体験を語る大仲シンスケさん＝5月18日、波照間島

遺族、犠牲者思い涙

沖縄戦79 80年

住民の4人に1人が亡くなった沖縄戦の終結から79年となる慰霊の日の23日、糸満市米須の魂魄の塔や摩文仁の平和の礎には早朝から多くの遺族や親族らが訪れ、亡くなった家族らに思いを寄せて恒久平和を願った。

米軍から移動を命じられた真和志村（現那覇市）や米須一帯の遺骨を収集して収めたのが魂魄の塔。収集された遺骨は5、6年の間で3万を超えた。23日午前6時すぎには、家族連れが花や飲み物を備えていた。

20日に梅雨明けした沖縄。23日午前7時時点で、手元の温度計で気温は、真夏日に該当する31度になっていた。真榮城玄信さん（91）は、沖縄戦で、兄の玄徳さんを21歳で、玄松さんを19歳で亡くした。玄徳さんの写真と玄松さんの召集令状を手に魂魄の塔を訪れた。

「兄貴たちの犠牲の上で豊かな生活がある。安らかに眠ってほしいと語りかけた」と真榮城さん。ウクライナ侵攻などについて触れ「戦争で苦しむのは結局市民だ。政治家はしっかりしてほしい」と厳しい表情で語った。

今年新たに県出身者24人を含む181人の名前を追加刻銘された平和の礎にも、早朝から遺族らが訪れた。家族の名前が刻まれた礎に花を手向け、手を合わせていた。刻まれた名前をなぞり、涙を流す人もいた。戦後79年がたった今も癒えない傷や怒り、悲しみを抱える県民は少なくない。

沖縄戦で叔父夫婦を失った新垣毅さん（45）は1人で平和の礎を訪れた。「20年前に沖縄に戻ってきてから毎年、礎を訪れている。慰霊の日は平和について考える日にしたい」と話した。

平和の礎には24万2225人の名前が刻まれている。（狩俣悠喜、吉田健一）

魂魄の塔に向かい平和を祈って手を合わせる子どもら＝23日午前7時51分、糸満市米須（大城直也撮影）

戦に怒り、祈りつなぐ

平和の詩 仲間さん（宮古高）思い語る

第34回「児童・生徒の平和メッセージ」の「平和の詩」の朗読者に選ばれた宮古高校3年の仲間友佑さんは14日、宮古島市の同校で記者会見を開いた。「私たちが（平和に向けて）祈りをつなぎ、願い続けることが世界の平和につながる大きな一歩になると思う」と、作品の詩「これから」に込めた思いを語った。

仲間さんはニュースやドキュメンタリーを見る中で、戦後から79年たった現在でも戦争や紛争がなくなっていないことに怒りを感じていたという。5月初旬から自身の中にある「怒り」と向き合いながら、1週間ほどで作品を仕上げた。

また、セミが鳴き始めて、慰霊の日が近づくと学生時代に平和学習で習った「月桃の花」が頭に浮かぶとして「短い命を一生懸命に生きようとするセミと、戦争でたくなった方々の姿を重ね、神に祈りたくなる」と話す。

母方の祖父母が戦後に生まれたことに触れ「沖縄戦からこれだけ時間がたっても、変わらない現状にあきらめを抱きそうになる。（平和への）祈りが薄れそうになるが、私たちが祈りをつながないといけない」と話し、戦争の記憶を風化させないために、今後できることを一人一人が考えていくことの重要性を強調した。（友寄開）

これから

県立宮古高校3年　仲間友佑

短い命を知ってか知らずか
蝉が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で
僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が
流れたという
今年十になった僕の
祖父母も戦後生まれだ
それだけの時が
流れたというのに

あの日
短い命を知るはずもなく
少年少女たちは
誰かが始めた争いで
大きな未来とともに散って逝った

大切な人は突然
誰かが始めた争いで
夏の初めにいなくなった
泣く我が子を殺すしかなかった
一家で死ぬしかなかった
誰かが始めた争いで
常緑の島は色を失くした
誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい
話したい、笑いたい
そういくら繰り返そうと
誰かが始めた争いが
そのすべてを奪い去る

心に落ちた
あの戦争の副作用は
微かな光さえも届かぬような
絶望すらもないような
怒りも嘆きも失くしてしまいそうな
深い深い奥底で
悲命にもきてくれた人々が
今日を繋ぎ留めた
僕の命も
友の命も
幾つもの君の命も
すべて

心に落ちた
あの戦争の副作用は
人々のロを固く閉ざした
まるで
戦争が悪いことだと
言ってはいけないのだと
口止めするように
思いだしたくもないほどの
あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ
抜けるような青空を
飛行機が横切る
僕にとってあれは
恐れるものではない
僕らは雨のように打ちつける
爆弾の怖さも
戦争の「せ」の字も知らない
けれど、常緑の平和を知っている
海は青く
あの日も
同じように太陽が照りつけていた
僕たちは知っている
平和が欠けることの怖さを

人は過ちを繰り返すから
時は無情にも流れていくから
今日まで人々は
恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた
あまりに大きすぎる悲しみを
手を繋ぐように
受け継いでいきた

それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りすらまた
まだたりないというのなら
それでも変わらないというのなら
僕らが祈りを繋ぎ続けよう
僕らが平和のために
紡ぐ平和が
いつか世界のためになる
そう信じて

今年もこの六月二十三日を
平和のために生きている
その素晴らしさを噛みしめながら

（提供写真は宮古島市平和祈念資料館提供）

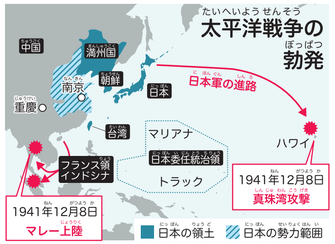
Q＆A 沖縄戦

小中学生新聞「りゅうPON！」平和学習特別号（5月19日付）より

Q1 なぜ日本とアメリカは戦争したの？

日本の攻撃が発端

1937年7月、中国・北京郊外で起きた発砲事件がきっかけとなり、日本と中国の全面戦争が始まりました。戦争が長引き、行き詰まった事態を変えようとした日本はフランス領インドシナに進駐しました。その結果、日本の経済活動を封じ込めようとしたアメリカやイギリスなど連合国との対立を深めました。41年12月8日（日本時間）に日本軍がマレー半島に上陸し、ハワイの真珠湾に泊まっていたアメリカ軍の艦船を襲撃したことで、沖縄も戦場になっていくアジア・太平洋戦争が始まりました。



Q2 なぜ沖縄が戦場になったの？

時間稼ぎの「捨て石」に

アジア・太平洋戦争で日本軍は米軍の反撃を受けて次々に敗退していきました。1943年9月、日本は戦争を続けるために確保しなければならない区域として「絶対国防圏」を設定しました。千島列島からマリアナ諸島、ミャンマーなどを結ぶ広い防衛線です。

日本軍は航空戦力の強化のため、43年夏ごろから沖縄本島や周辺離島などに飛行場を建設しました。44年3月には南西諸島の防備強化のために第32軍を創設しました。

しかし44年7月に、「絶対国防圏」の重要な場所だったサイパン島が米軍に攻め落とされます。次に米軍が侵攻するのは沖縄だと判断した日本は44年7～9月にかけて沖縄に第32軍の部隊を送り込みました。

一方、米軍の最終目標は日本本土に侵攻して日本を降伏させることでした。そのために沖縄を占領し、本土への攻撃基地を造る必要がありました。米軍は45年3月26日に慶良間諸島、4月1日に沖縄本島に上陸しました。

第32軍は米軍の本土侵攻を遅らせるために沖縄でできるだけ足止めする持久作戦をとりました。沖縄戦は、時間稼ぎの「捨て石作戦」だったのです。

Q3 何人ぐらい戦ったの？

県民を根こそぎ動員

米軍の上陸が迫る1945年3月下旬、沖縄には約11万人の日本軍がいました。このうち約2万4000人は沖縄にいる一定の年齢の男子を集めた「防衛隊」や「義勇隊」、今の中学生や高校生くらいの生徒たちでつくる「学徒隊」でした。足りない戦力を補うため戦場で役に立つ県民を根こそぎ動員したのです。

壕などに避難している若者を正式な命令なく、強制的に部隊に動員して戦闘に参加させた例もあります。日本軍に動員された人の正確な数は今も分かっていません。

対する米軍の総兵力は当時の沖縄県の人口を上回る約55万人でした。

沖縄戦における日米兵力の差

日本		アメリカ
約11万人	総兵力	54万8,000人
日本軍 約8万6,400人		
防衛隊・学徒動員 約2万4,000人		うち 上陸部隊 18万3,400人

参考文献：「沖縄県史 各論編6 沖縄戦」「ひめゆり平和祈念資料館 資料集4 沖縄戦の全学徒隊」

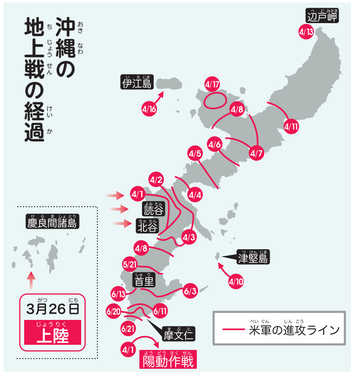
Q4 兵隊以外も巻き込まれたのはなぜ？

作戦優先し住民守らず

戦争は軍隊同士が戦うものですが、沖縄戦では住民のための十分な避難計画が立てられなかったため、軍人と住民が入り交じった状態で地上戦が繰り広げられました。兵力が不足していた日本軍は住民も戦闘に協力させました。

日本軍が住民の命よりも軍の作戦を優先したことも住民の犠牲を大きくしました。1945年5月下旬、日本軍は米軍の猛攻を受けて壊滅状態に陥りました。しかし、降伏せずに首里の司令部を捨てて、約10万人の住民が避難する南部に退き戦闘を続けました。本土で戦争の準備をするために米軍を沖縄で足止めにする作戦をとったのです。その後、日米両軍による戦闘は約1カ月続きました。

南部では追いつめられた日本兵による壕追い出しや食料強奪が発生しました。日本軍は住民の投降も許しませんでした。日本軍を追う米軍は無差別攻撃を加えました。住民は日米両軍の戦闘に巻き込まれ、逃げ場を失いました。日本軍の南部撤退後の6月に住民の犠牲者が急増しています。日本軍が首里で降伏し、戦闘が5月で終わっていれば軍人も住民も、大勢の人の命が助かったかもしれません。



「りゅうPON！」平和学習特別号

琉球新報社は79年前の沖縄戦の学習に役立ててもらおうと、5月19日付で「琉球新報小中学生新聞りゅうPON！平和学習特別号」を発行しました。8月31日までは、新報ウェブサイト内特設コーナー「りゅうPON！学ぼう沖縄戦」（QR）で紙面データを無料でダウンロードできます。

購入希望も受け付けます（学校は5部以上でNIE価格1部40円）。申し込み・問い合わせは地域読者局、電話098（851）5190（平日午前10時～午後5時）

忘れない 無念の死映す名前

平和の礎追加刻銘 県出身半数子ども

「平和の礎」に設置される新たな刻銘板＝19日、糸満市摩文仁の平和祈念公園（小川昌宏撮影）

沖縄戦などで亡くなった人の名前を記す「平和の礎」（糸満市摩文仁）に、今年も追加刻銘がある。追加される181人のうち、県出身者は24人。その半数の12人が12歳以下の子どもだ。中には生後間もない乳児もいた。女性は13人だった。無念の死を忘れない。申請者の思いが込められた名前が79年を経て刻まれる。

平和の礎には、出身地ごとに名前だけが刻銘されるが、申請時には、分かる範囲で生年月日や亡くなった日、場所などが届けられている。

県平和・地域外交推進課は、琉球新報の取材に、24人の生年月日と死没年月日、死没場所を明らかにした。24人のうち、沖縄戦があった県内で亡くなったのは7人。1945年2～9月の期間に命を奪われた。

45年6月1日に生まれた比嘉良子さんが亡くなった日は不明だが、月内に息を引き取ったという。上原洋子さんは生まれた日も命日もはっきりせず、年齢は1～2歳としか分からない。（宮沢之祐）

◇　◇

名簿の見方【出身市町村】名前（死亡年齢）戦没年月日、戦没場所【今帰仁村】田港朝仁（11）1945年9月3日、ルソン【伊平屋村】當間ユリチ（9）1945年6月3日、伊平屋村【伊江村】島袋東介（5）＝1945年4月30日、伊江村【名護市】當眞勝秀（不詳）1945年9月23日、名護市▽仲兼久政吉（5）1944年9月28日、サイパン▽仲兼久洋子（4）1944年9月28日、サイパン【喜野座】知名一成（不詳）1944年5月7日、ボナペ【金武町】仲田恭子（12）1945年10月23日、ミンダナオ▽仲田安子（8）1945年10月23日、ミンダナオ▽仲田百合子（5）1945年10月23日、ミンダナオ▽仲田幸三（3）1945年6月1日、ミンダナオ【うるま市】伊芸百一郎（21＝被爆時）長崎で被爆▽屋良武信（17＝被爆時）長崎で被爆【北谷町】仲地和子（不詳）1945年、パラオ【浦添市】比嘉良子（0）1945年6月、糸満町【那覇市】比嘉幸子（13＝被爆時）広島で被爆▽宇榮原牡（3）1945年6月27日、越来村【与那原町】神谷厚雄（20＝被爆時）長崎で被爆【糸満市】上原榮子（23）1945年7月18日、パラオ▽上原カミ（50）1945年6月11日、糸満町▽上原洋子（1～2）1945年7月、パラオ【座間味村】奥那嶺マサ（35）1945年5月18日、鹿児島県【粟国村】安里德助（31）1945年8月26日、旧満州【宮古島市】伊計フミ子（24）1945年2月13日、伊良部町

97歳の女性は、礎に刻まれた両親や集落の人たちの名前を見て当時を思い出して涙ぐんだ＝23日午前8時6分、糸満市摩文仁の平和公園（喜瀬守昭撮影）

不戦 今こそ

朝日に向かって手を合わせる家族＝23日午前６時11分、糸満市摩文仁の平和祈念公園（ジャン松元撮影）

静かに手を合わせて平和を祈り、魂魄の塔を後にする遺族ら＝23日午前７時23分、糸満市米須（大城直也撮影）

落石や増水の恐れから立ち入りの注意喚起がされる轟の壕で、たまった落ち葉を払う平和ガイドの女性＝23日午前７時22分、糸満市

花や線香に、持参した祖母の写真を並べる津嘉山智恵さん（49）。「母は高齢になったけど元気だよと伝えた」と話し、「私の娘が似ていると思う」と写真の祖母に語りかけた＝23日午前７時25分、糸満市摩文仁の平和祈念公園（小川昌宏撮影）

沖縄戦特設サイト

ホームページ「琉球新報デジタル」には沖縄戦の特設サイトがあります。沖縄戦までの経緯や体験者の証言、沖縄県内の資料館や戦跡、まんがで伝える沖縄戦、沖縄戦に関する用語などを紹介しています。QRコードからアクセスできます。

慰霊の日 各地の様子

琉球新報デジタルでは「慰霊の日」に関する各地の様子を写真で紹介しています（随時更新）

▶詳細はあすの紙面をお読みください　▶ryukyushimpo.jp